

保育者養成校の教育相談の授業における アクティブ・ラーニングの可能性

高橋美枝

The Possibility of Active Learning Method of Teaching Educational Counseling in Junior College for Bringing up to a Practical Nursery Teacher and a Practical Kindergarten Teacher

TAKAHASHI Mie

キーワード：アクティブ・ラーニング、教育相談、
保育者養成、主体的学習

はじめに

グローバル化や情報化が進展し、少子高齢化が進行するなど社会の急激な変化が進行している中、予測困難な時代を切り拓く人材の育成が大学に期待されている。

平成24年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」¹⁾では、予測困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる「学士力」を育むために、学士課程教育における質的転換が必要であるとし、その方策の一つとしてアクティブ・ラーニングや反転授業といった双方向の授業による主体的な学修の導入が挙げられた。

また、平成28年3月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」²⁾を受け、平成29年3月には幼小中の学習指導要領等の改訂の告示が公示され、その改訂において、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善の方向性が示されている。高等学校の学習指導要領の改訂の告示も平成30年度中に予定されており、アクティブ・ラーニン

グの視点からの授業改善は、小・中・高等学校から大学まですべての教育において重要な課題となっている。

「教育相談」では、幼児理解や教育相談の理論及び方法について、学生が理解し実践できるようになっていくことが求められる。そのためには、講義だけでなく主体的な学修が必要となり、これまで授業にアクティブ・ラーニングを導入してきた。実践を振り返るとともに、学生への質問紙調査を通して、講義とアクティブ・ラーニングについて学生がどのように感じているかを把握していきたい。

目的

アクティブ・ラーニングを導入した「教育相談」の授業の実践と、それに対する受講学生を対象とした質問紙調査により、アクティブ・ラーニングによる授業の可能性について検討する。

倫理的配慮

本研究では、学生に対する質問紙調査を実施している。調査にあたっては、学校法人小池学園研究倫理規程に基づき、あらかじめ研究テーマ、研究の主旨、調査データの扱いや個人情報保護に関して質問紙に記載し説明を行った。参加、不参

加は自由であり、不参加であることで不利益を被ることがないことについても説明を行い、同意の得られた学生を調査対象者とした。調査内容については、個人情報保護するとともに、情報漏洩の防止に十分配慮した。

アクティブ・ラーニングを取り入れた

「教育相談」

1. 「教育相談」の位置づけと到達目標

「教育相談」は幼稚園教諭二種免許状取得のための教職課程の授業科目として位置づけられている。教員免許状施行規則に定められた科目区分においては、教職に関する科目の生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目の「幼児理解の理論及び方法」と「教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法」の両方を含む科目として設計している。

このような位置づけから、授業の到達目標を次のように設定した。

〔授業の到達目標〕

- 1 幼児理解についての知識を身につけ、考え方や基礎的態度を理解する。
- 2 幼児理解の方法を具体的に理解する。

- 3 園における教育相談の意義と理論を理解する。
- 4 教育相談を進める際に必要な基礎的知識を理解する。
- 5 教育相談の具体的な進め方やポイント、組織的な取組みや連携の必要性を理解する。

2. 「教育相談」の授業計画

「教育相談」では、授業の到達目標を達成する授業内容として、各授業回に表1のとおりテーマを設定して授業計画を作成した。

3. シラバスにおける授業方法の記載

シラバスの〔授業方法〕の欄には次のように記載し、受講学生にあらかじめ授業の方法を示した。〔授業方法〕

講義により、子ども理解やカウンセリング理論や教育相談の技術について学ぶとともに、ワーク、ロールプレイによる体験的理解を行う。また、体験を小グループで話し合ったり、発表したりすることで、体験の共通性と個別性についての理解をはかっていく。さらに、事例の検討を行う。事例について、さまざまな観点から検討し、クラス内でディスカッションする形式での授業をすすめる。

表1 「教育相談」授業計画

回数	テーマ
第1回	子ども理解の意義とカウンセリングマインドの必要性
第2回	子どもの発達理解
第3回	子どもを理解する視点1：生活・遊び・学びと個と集団
第4回	子どもを理解する視点2：保護者と親子関係の理解
第5回	子どもを理解する方法
第6回	カウンセリングの基礎理論
第7回	コミュニケーション・スキル
第8回	カウンセリングの基本的な姿勢と技法1：受容技法、繰り返し技法、傾聴
第9回	カウンセリングの基本的な姿勢と技法2：明確化技法、支持技法、質問技法
第10回	園、地域における専門家との連携
第11回	事例による理解1：子ども同士のいざこざ／仲間に入れない子ども
第12回	事例による理解2：すぐに暴力を振るう子ども／登園渋り
第13回	事例による理解3：虐待やネグレクトが疑われる子ども／障害がある子ども
第14回	事例による理解4：保護者からの相談
第15回	保育者の専門性と相談活動

※平成29年度入学生 授業計画

園における事例検討会（ケース・カンファレンス）に近い形式での授業を行う。

毎回の授業の最後にリアクション・ペーパーを学生が記入、提出し、次の授業の初めに担当教員から質問事項への回答、解説を行う。また、毎回コメントを記入して返却するので、学修の参考にしてほしい。

第1回の授業で、シラバスに基づき授業方法について詳細に説明した。

4. 各回の授業の構造と配付資料、記録用紙

授業の構造は、次のような枠組みとした。

<授業開始時>

- ①出席確認
- ②あいさつのワーク

本授業では、毎回の授業の開始時、終了時に「挨拶のワーク」を実施した。受講学生が順番に開始時1名、終了時1名、教室の前に出て、ミニスピーチなどを行って挨拶の合図を行った。

- ③前回授業の提出物の返却、家庭学習課題の回収、授業資料の配付

授業における提出物にコメントをつけて返却した。その際、受講学生全体に対して、質問への回答及び提出物についての講評を行った。合わせて、家庭学習課題の回収及び授業資料の配付を行った。授業資料はその回の授業の「STUDY GUIDE」とアクティブ・ラーニングの各ワークについての記録用紙から構成された。それぞれに授業資料の内容については、授業プログラムの進行との関連で、次の<授業プログラムの進行>の中で説明する。

<授業プログラムの進行>

「STUDY GUIDE」にその回の<テーマ>とテキストの該当するページを記載しており、その内容を確認した。授業の進行について<授業プログラム>として記載した。各授業回における講義とアクティブ・ラーニングの活動全体の流れを示し、授業の進行状況を確認して学修できるよう工

夫した。「STUDY GUIDE」には講義の記録が記せるように、記入欄を設定した。アクティブ・ラーニングの活動についての記録用紙は、「STUDY GUIDE」とは別に配付した。

アクティブ・ラーニングの活動については、記録用紙を作成し、活動のプロセスの記録を記入できるようにした。特にグループディスカッションを行う際には、各テーマについて、ディスカッション開始前に、各自が考えたこと、気づいたことの記録、ディスカッションの記録、ディスカッション後の気づきの記録、グループでのディスカッションを全体で報告する際に、他のグループの発表から気づいたことの記録、全体の活動を通じての発見を記載できるようにした。記録用紙は授業終了時に提出を求めることにより、各学生の参加状況を把握するとともに、グループでの活動と各学生の理解との関係について授業担当教員として確認すると共に、取り組み方と理解の内容についてコメントを記載した。

<授業終了時>

- ①各授業回のテーマと実際の講義とアクティブ・ラーニングの活動との関係の確認
- ②全体を通しての学生からの質問とそれに対する解説
- ③家庭学習についての説明
- ④リアクション・ペーパーへの学生の記入
リアクション・ペーパーは授業への質問、感想、要望を自由記述で記載できる形式とした。
- ⑤次回の授業回の授業日時とテーマの確認
- ⑥あいさつのワーク
- ⑦授業内提出物の回収

「STUDY GUIDE」は授業の記録となり、学生が家庭学習において復習をしたり、家庭学習課題に取り組む際に使用することがあるので、提出は求めず、学生が準備したファイルへの保管を促した。アクティブ・ラーニングの活動記録と、リアクション・ペーパーの提出を求め、授業終了時に回収した。

質問紙調査

1. 調査対象者

A 短期大学幼児保育学科において、平成 30 年度に「教育相談」を受講した 2 年生 62 名に対して第 14 回目の授業の終了時に、質問紙調査を行った。研究の主旨等を説明し、同意が得られた 44 名が調査に協力した。受講者の 71.0%が質問紙調査に応じた。

2. 質問紙の構成

教育相談の授業で実施した 15 の授業場面を順不同で配置し、「楽しく学べる」「理解しやすい」「深く理解できる」「将来に役立つ」のそれぞれについて、“とても当てはまる”、“当てはまる”ものについて回答を求めた。

15 の授業場面のうち、ロールプレイ以外の体験学習が 5 場面、ロールプレイが 3 場面、講義が 3 場面、プレゼンテーションが 2 場面、グループワークが 2 場面とした。ロールプレイは体験の中から学ぶ体験学習といえるが、それ自体が対人関係の要素が大きいので、対人関係の要素の薄い体験学習と今回の調査では別に分けて扱った。

さらに、自由記述で「講義形式の授業の良いところ」「講義形式の授業の良くないところ」「アクティブ・ラーニング形式の授業の良いところ」「アクティブ・ラーニング形式の授業の良くない

ところ」について回答を求めた。その際に、講義形式は「先生が説明して、学生がノートを取る形式」、アクティブ・ラーニングは「講義形式以外の授業。グループワークや発表、体験的な授業等」を指すと操作的な定義を示し回答を求めた。

3. 質問紙調査の結果

(1) 授業場面の分類による授業への意識

講義、体験学習、ロールプレイ、プレゼンテーション、グループワークごとの、「楽しく学べる」「理解しやすい」「深く理解できる」「将来に役立つ」のそれぞれの意識について、“とても当てはまる”“わりと当てはまる”との回答の割合は表 2 のとおりである。

「楽しく学べる」について、“とても当てはまる”“わりと当てはまる”の回答割合は、体験学習、ロールプレイが高く、講義で最も低い。「理解しやすい」ではロールプレイ、グループワークが高い。最も低いプレゼンテーションでも 50.0%である。さらに、これに対して「深く理解できる」では、講義が最も高く 60%を超え、グループワークが続いている。「将来に役立つ」では、ロールプレイが最も高い割合を示しており、次いでグループワークとなっている。

(2) 講義形式の授業の良いところ

講義形式の授業で良いところについての自由記述による回答の内容で、最も多かったのは、「自

表 2 授業の分類による授業への意識

	講義		体験学習		ロールプレイ		プレゼンテーション		グループワーク	
	とても当てはまる	わりと当てはまる	とても当てはまる	わりと当てはまる	とても当てはまる	わりと当てはまる	とても当てはまる	わりと当てはまる	とても当てはまる	わりと当てはまる
楽しく学べる	9.8%	30.3%	29.5%	31.4%	27.2%	32.6%	18.2%	29.5%	17.0%	33.0%
	40.1%		60.9%		59.8%		47.7%		50.0%	
理解しやすい	23.4%	31.8%	20.5%	33.2%	36.4%	25.8%	18.2%	31.8%	29.5%	29.5%
	55.2%		53.7%		62.2%		50.0%		59.0%	
深く理解できる	22.0%	38.6%	20.9%	33.2%	18.9%	34.1%	12.5%	34.1%	20.5%	35.2%
	60.6%		54.1%		53.0%		46.6%		55.7%	
将来に役立つ	17.4%	30.3%	10.5%	30.5%	31.8%	26.5%	13.6%	35.2%	27.2%	29.5%
	47.7%		41.0%		58.3%		48.8%		56.7%	

分でわかりやすいようにノートにまとめられた」「大事なところは自分でメモが取れる」「重要なポイントが押さえられる」などの、『ノートやメモが取りやすい』という内容で、9回答であった。2番目に多かったのは「自分で集中できる」「集中できる」「知らない知識を集中して学ぶことができる」の『集中できる』で6回答であった。次に「専門的なお話を聞くことができる」「先生の実践の話が聞ける」「しっかり聞けるので役に立つ」などの『しっかり話が聞ける』で5回答であった。また、「わかりやすい」「理解しやすい」「説明がわかりやすい」などの『わかりやすい』も5回答であった。その他に『たくさんのが学べる』3回答、『質問しやすい』3回答、『自分のペースで学べる』2回答、『他の人と関わらない』2回答であり、「席移動がない」「たのしい」という回答も見られた。

このように、教員の方であらかじめ資料を準備し、まとまりをもって説明する講義形式の授業は、ノートが取りやすく、分かりやすいと感じられていた。また、効率的な学習が可能で『たくさんのが学べる』と感じている学生もいた。また、『自分のペースで学べる』『他の人と関わらない』という回答を行っている学生は、グループワーク等を含む他者との関わりの中で学修を進めるアクティブ・ラーニングに苦手意識を持っていることが考えられる。

(3) 講義形式の授業の良くないところ

講義形式の授業の良くないところについての自由記述の回答の内容で最も多かったのは、「うるさい人がいる」「話を聞かない人が出てくる」などの『おしゃべりなどの授業態度』の内容で9回答であった。続いて講義形式の授業の良くないところは「特にない」「あまりない」などの『ない』が8回答であった。『ねむくなる』が5回答、「先生がずっとしゃべっているだけでつまらない」「一方的になってしまう」などの『一方的』も4回答あった。『集中が続かない』『ノートが取りにくい』がそれぞれ3回答であり、『質問しにくい』

が2回答であった。

講義形式において、おしゃべりなどが発生しやすく、集中力を保つことの難しさは、ねむくなるということにもつながっているといえる。また、講義形式の授業への親和性が高い学生は、講義形式の授業の良くないところは『ない』と回答していることにも注意する必要がある。

(4) アクティブ・ラーニング形式の授業の良いところ

アクティブ・ラーニング形式の授業の良いところについての自由記述の回答の内容で最も多かったのは、「他の人の意見が聞けて、考えが広がる」「自分の考えとは違う考えがわかる」「友だち同士で考えたり意見を出し合って深めることができる」などの『他者との学びによる広がりや深まり』の内容で12回答であった。続いて「楽しく学べる」「楽しい」の『楽しい』で10回答であった。「いろいろな人とコミュニケーションがとれる」「相談しながらできる」などの『他者との協力』の内容も7回答あった。さらに、『経験からの学び』が3回答、『一方的でない』2回答、『ねむくならない』2回答であった。

この回答の内容からは、学生がアクティブ・ラーニングの授業の特徴を生かして、一人の学習や講義形式の授業では得にくい他者との関係の中での学びを体験し、それをたのしいと感じていることがわかる。

(5) アクティブ・ラーニング形式の授業の良くないところ

アクティブ・ラーニング形式の授業の良くないところについての自由記述の回答の内容で最も多かったのは、アクティブ・ラーニングには良くないところは『ない』であり、10回答であった。「仲良くない人となったときはいや」「話したことのない人とはやりにくい」などの『グループメンバーの構成』の8回答、「発言する人がいつも同じ」「意見を出さない人がいる」「一人ひとり考えるのが難しい」などの『グループでの学修の難し

さ』が8回答であった。「疲れる」「移動が面倒」など消極的な『疲れる、大変』が6回答であった。『緊張、恥ずかしさ』の回答が2回答あった。

アクティブ・ラーニング形式の授業を肯定的に受け止めている学生は、アクティブ・ラーニング形式の授業の良くないところは『ない』と回答している。A 短期大学では幼児保育学科ということで、幼稚園教諭二種免許状、保育士資格の取得のための教育課程が編成されている。卒業必修科目、資格、免許状取得のための必修科目の授業に占める割合が高い。これらの授業は、メンバーが固定されたクラス単位で実施している。仲の良いクラスメート、苦手な相手などの対人認識がすでに出来上がっており、『グループメンバーの構成』という回答が多かった。また、アクティブ・ラーニング形式の授業でグループワークを実施することが多くあった中で、『グループでの学修の難しさ』の回答が多かった。また、講義形式の授業と比較して、主体的な活動を求めることから、良くないところとして『疲れる、大変』との回答も見られた。人前でのプレゼンテーションやあまり親しくない人との活動について、苦手意識を持っている学生の中には『緊張、恥ずかしさ』の回答もあった。

この結果を表3にまとめた。() 内に回答数を示した。

考察

授業の分類による授業への意識の結果によると、講義形式の授業は、「楽しく学べる」では“とても当てはまる”“わりと当てはまる”の割合が低かった。講義形式の授業の良くないところについての回答で、『おしゃべりなどの授業態度』『ねむくなる』『集中が続かない』の回答が見られたことと合わせて、授業の教員から学生への一方向となりやすい講義形式の授業の特性が表れているといえる。つまり、講義形式の授業では受動的な受講態度が形成されやすく、集中力が途切れるとおしゃべりやねむくなるという状態に結びつきやすくなる。

その一方で、授業の分類による授業への意識の結果において「深く理解できる」は講義形式が最も“とても当てはまる”“わりと当てはまる”の割合が高く、「理解しやすい」についても比較的高い割合を示している。講義形式の授業の良いところの回答内容で、『ノートやメモが取りやすい』『集中できる』『しっかり話が聞ける』『わかりやすい』の回答が見られたことと合わせると、講義で教員の専門性からの授業を受け、それについてノートを取り家庭学習において振り返る学習のプロセスに集中することで、深い理解にたどり着いていると感じていると考えられる。これは、アクティブ・ラーニング形式の授業の良くないところ

表3 授業の形態ごとの良いところ、良くないところ

	講義形式授業	アクティブ・ラーニング形式授業
良いところ	ノートやメモが取りやすい (9) 集中できる (6) しっかり話が聞ける (5) わかりやすい (5) たくさんのが学べる (3) 質問しやすい (3) その他	他者との学びによる広がりや深まり (12) 楽しい (10) 他者との協力 (7) 経験からの学び (3) その他
良くないところ	おしゃべりなどの授業態度 (9) ない (8) ねむくなる (5) 一方的 (4) 集中が続かない (3) ノートが取りにくい (3) その他	ない (10) グループメンバーの構成 (8) グループでの学修の難しさ (8) 疲れる、大変 (6) その他

の回答で、『グループメンバーの構成』『グループでの学修の難しさ』の回答が多くみられることとも関連している。学生は他者との協働学習を円滑に進めることにエネルギーを要しており、その必要があまりない講義形式の授業において、落ち着いて深く理解できると感じていることが考えられる。

しかし、「将来に役立つ」では“とても当てはまる”“わりと当てはまる”の割合が最も高いのは、グループワーク、次がロールプレイになっている。「教育相談」では、事例についての検討を、グループワークによって実施した。また、カウンセリングの基本的な技法などの学習は、ロールプレイで実施した。これらの学習は、具体的に将来に役立つことを学生が感じる事ができたといえる。アクティブ・ラーニング形式の授業の良いところで、『他者との学びによる広がりや深まり』が最も回答が多かったことも、事例検討のグループワークにおいて、一人では考えつかないような結論に到達することや、新しい発見をすることができたと考えられる。

「教育相談」の授業では、知識を伝達し、学生が理解をできるようにしていくことは重要である。一方で、卒業後、幼児教育や保育の現場で「教育相談」の授業で学修したことを活用していく上では、教えられたことを覚えていくというスタイルの学修で対応できない。一つの解答ではなく、いろいろな考え方やいくつもの正解があるということを実感していくためには、アクティブ・ラーニング形式の授業が必要となる。

「教育相談」の授業をより充実させていくためには、講義形式の授業が有効な内容と、アクティブ・ラーニング形式の授業が有効な内容の見極めを行うとともに、それを各回の授業にどう組み立てていくかについて詳細に検討し、「あきる」「疲れる」ということを防いでいきたい。また、アクティブ・ラーニングの中での学修のプロセス、理解の深化を学生自身が記録し振り返れるようにすることが、学修による成果を蓄積していく上では重要である。現在はテキストのほかに、STUDY

GUIDE やアクティブ・ラーニングの活動の記録用紙を配付し学生が個々に自分のファイルに保存しているが、将来的にはワークブックとしてまとめて、授業開始時に配付して活用していくことにより、より成果の蓄積を確実に行っていきたい。

他者との関わりに対して苦手意識の強い学生は、必ず一定数いるものと思われる。グループ構成や活動の組み立てなどを工夫し、学修の場で対人関係について少しでも自信をつけていくことが、幼稚園などの幼児教育や保育に就労した際にも、役立つと考えられる。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申) 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2018年11月15日閲覧)
- 2) 文部科学省 (2016) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申) 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm (2018年11月15日閲覧)

高橋美枝 (埼玉東萌短期大学教授)

